



変化の激しい時代を生きるために
子どもの強みを生かす

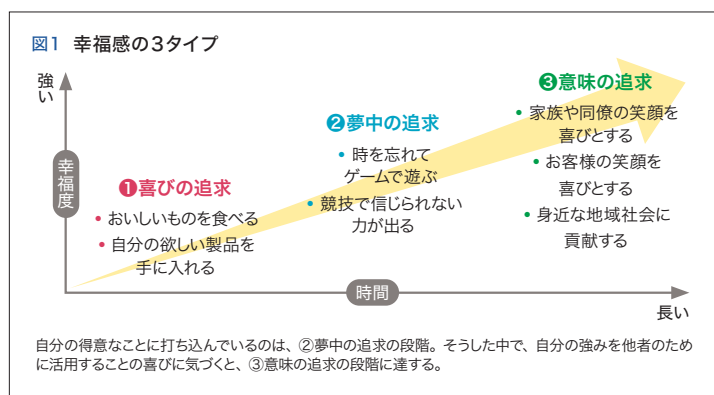
幸せ視点

からの大学選び

と向き合い、力を合わせる姿勢は、人間ならではの資質・能力として、今後さらに必要とされていくでしょう。

強みを生かすことが 幸福感を高める

個人の強みを生かしやすい環境では、幸せを感じる機会も増えます。というのも、人間は、自分の好きな、得意なことに打ち込む中で、幸福感を高めて



現代社会は、AI技術の進歩などによって大きく変化し、今後の予測が難しくなっています。従来の「常識」が通用しないこともある中、これからの社会を生きる子どもたちのためには、どのような視点から大学を選べばよいのでしょうか。ビジネスの第一線で活躍するとともに、大学で経営学を教えている齊藤徹氏に、お話を伺いました。

人間ならではの 資質や強みが重要

保護者の皆さまは、偏差値や知名度、就職率といった基準から、子どもの大学を選ぶうとしていませんか？ 今後、も急激に社会が変化していくと言われる中、そうした考えは、子どもの将来にプラスにはならないかもしれません。私は、コンピュータやデータ通信などに関わる事業を手がけていますが、テクノロジーの進化は、人間の生活だけでなく、人生観をも大きく変えるものだと実感しています。特に、プロ



株式会社ループス・コミュニケーションズ 代表取締役社長 齊藤 徹氏
 1961年生まれ。東京都・私立駒場東邦高校を経て、慶應義塾大学理工学部を卒業。日本IBMでコンピュータ・ソフトの開発などに取り組んだ後、91年に同社から独立・起業。2016～19年度、学習院大学経済学部経営学科特別客員教授。20年4月、ビジネス・フレイクスルー大学教授に就任予定。著書は『ソーシャルソフト』（日本経済新聞社）、「再起動（リブート）」（ダイヤモンド社）など多数。

ソーシャルメディアがもたらした社会変化、いわゆるソーシャルシフトは、企業や組織のあり方にも影響を及ぼしています。具体的には、上司が部下に一方的な指示を出すのではなく、社員一人ひとりが対話を重ね、互いの強みを発揮していけるよう、フラットな人間関係が大切にされるようになりました。私自身、常に社員との協働を意識した経営を行っています。テクノロジーの進化は続きますが、多様な他者

いくからです（図1）。例えば、趣味に没頭し、時がたつのも忘れたといった経験が、保護者の皆さまにもあるのではないのでしょうか。

何を幸せだと感じるかは人によって異なりますが、以前は経済的な豊かさや人生の幸せに結びつける人が多かったように思います。しかし、お金を目標にすると、「達成できないかもしれない」という不安が大きくなり、気が休まる暇さえなくなることも。そもそも、経済大国である日本ですが、「自分は幸せだ」と胸を張って言える人はどれくらいいるのでしょうか。一人ひとりの強みや人間関係のフラット化が進む現代社会では、「お金視点」よりも、自分の好きなことを大切にしたい「幸せ視点」からの将来設計が、幸せへの近

道になります。楽しいことや強みを生かして得られる内発的な幸福感は、お金などがもたらす外発的な幸福感よりも強く、長く続きます。「強み」があり、それを伸ばすことが重要なのです。

大学で教えることで知った、 若者の可能性

子どもの大きな岐路となる大学選びでも楽しみながら強みを伸ばし、将来に立つて子どもの興味・関心を尊重しましょう。

私は学習院大学経済学部経営学科で教えていましたが、授業でも「幸せ視点」に立ち、私と学生の双方のコミュニケーションを大切にしました。例えば、授業ごとにLINEのグループを

COLUMN

AI、データサイエンス、 地域創生と多様化する学び

大学は時代のニーズに応じて進化中。データサイエンス系の学部が全国で増える中、千葉工業大学は、人工知能が大量の花の写真を深層学習することによって得た花の分類能力を可視化するAI「ハナノナ」など、世界最先端の技術を創造。学生がロボット開発に取り組むプログラムなどを通して、実践的な学びも充実させている。

一方、地域創生を担う人材育成に力を入れる大学も。その一つが、2021年度開学をめざす兵庫県立の国際観光芸術専門職大学（仮称）で、芸術文化と観光の両方を学び、地域に新たな活力を創出する方策を探究していく。



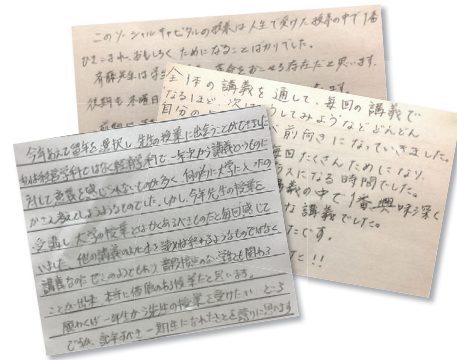
「ハナノナ」で創った「花マップ」は、写真や絵から400種以上の花を識別し、ディスプレイに表示

これが今、現実に大学で起こっているのです。このような学びの環境があることは、「幸せ視点」からの大学選びにおける最重要ポイントの一つです。

大学の授業のリアルな情報 卒業生に聞く

大学でどのような学びが行われているのかを判断するには、大学の雰囲気を感じられるオープンキャンパスに参加するとよいと思います。その一環として、模擬授業や研究室の見学ツアーなどを実施している大学もあります。気になる大学のオープンキャンパスにはぜひ参加するよう、子どもに声をかけましょう。

ただ、模擬授業と実際の授業では違いがあることも。そこで、普段から学生と向き合い、「幸せ視点」に立った、強みを伸ばす授業をしている教員がどうかを知ることが肝心です。それには、その大学・学部の学生や卒業生に聞くのがベストです。例えば、オープンキャンパスで在学生に直接聞いた、子どもの高校の先生に志望校に進学した卒業生を紹介してもらうという方法も。また、卒業生のSNSを見たり、口コミを参考にするのもZ世代らしいでしょう。授業の進め方は教員次



コメントシートでは、授業での気づきを基に、自分の行動を改めていこうと意欲を述べる学生がめだった

開設。私から授業の連絡事項を配信したり、授業で活用するアンケート調査を行ったりする一方、学生には、授業についての質問はもちろん、授業と関係がなくても、気がかりなことがあれば連絡してほしいと呼びかけました。また、教員になった当初は、「Z世代」の学生の実態を知りたいと、学生にアドバイスを求めたこともあります。

毎回の授業では、私が一方的に話すのではなく、学生一人ひとりが主体的に考えることを心がけ、学生同士が授業内容について対話をする場面などを積極的に設けました。また、学生が学びを自分事として捉えられるよう、コメントシートを書いてもらい、多くの学生の参考になるようなコメントは、

COLUMN

「親業」は、よりよい関係を築くお手本！

「親業」は、アメリカの臨床心理学者トマス・ゴードンが、発達心理学や教育学などの研究を生かして開発したコミュニケーションプログラム。ポイントとしては、『わたしメッセージ』で話す「能動的傾聴」などがある(図3)。よりよい関係の構築に生かせることから「親業」と呼ばれるが、汎用性が高いため、人間関係一般に応用できる。

図3 「親業」のコミュニケーションの例

「わたしメッセージ」で話す

相手に腹を立てると、「(あなたは)なぜ早く帰って来ないの?」などと、相手を主語にして話してしまいがち。「あなたの帰りが遅いから、私はすごく心配だった」と自分を主語にしてメッセージを伝えることで、怒りに流されずに、自分の思いを相手に伝えられる。

能動的傾聴

自分の考えは横に置き、相手の経験していること、思考や感情に共感し、相手の内面を意識して耳を傾ける。

第なので、個々の教員についてのリアルな情報収集が重要になります。

志望大学・学部を決めるにあたっては、話し合いが大切になります。保護者と子どもの考えが違うのは当然のことです。保護者の思いを伝えるとともに、子どもの希望にしっかりと耳を傾



大学選びでは、子どもの希望を尊重しつつ、保護者の思いを子どもに伝えられるよう、話し合うことが大切

けることによって、両者にとってよりよい考えが生まれることもたくさんあります。そうした建設的なコミュニケーションは、発達心理学がベースにある「親業」のスキルです。

大学で何の学問を学びたいのか、社会で何がやりたいのかは、あくまでも子ども自身が決めること。保護者の方には、子どもが興味・関心を持っている分野に進めるよう支援することが大切です。人間は、得意な、好きな分野に取り組む中で、強みを生かし、幸福感を何倍にも膨らませていきます。子どもの幸せは、保護者の幸せです。子どもの強みを生かせるよう、その力を信じ、「幸せ視点」からのサポートを心がけましょう。

COLUMN

「ソーシャルネイティブ」Z世代って?

アメリカでは、生活スタイルなどの違いから、1965～80年生まれを「X世代」、81～95年生まれを「Y世代」、96～2010年生まれを「Z世代」と呼ぶ。Z世代は、物心つく頃からソーシャルメディアに親しんでいるため、「ソーシャルネイティブ」という別名も。ここでは簡単に日本のZ世代の特徴である4タイプについて紹介する(図2)。

図2 日本のZ世代の4タイプ

タイプ	特徴
①様子見 フォロワー	価値観のばらつきが大きく、めだった特徴がない
②省エネ ベシミスト	人付き合いが苦手で、悲観的。真面目な性格でモノにこだわりがない
③ソーシャル よい子	SNSを使いこなす。トレンドに敏感で、他者の目が気になる
④人生 ガチ勢	リーダー気質を持つ社交家で、伝統的価値観が強い

※Z世代会議「Z世代レポート2018」を基に編集部で作成。

次回の授業で紹介しました。

次第にさまざまな学年の学生が集まる自主ゼミが生まれました。ゼミ生同士は社会的な課題を設定し、対話しながら、解決策を練りました。学生が互いの強みを生かし、新しい価値を創造する場にできた実感しています。

実際、ゼミの中心メンバー数人は、株式会社「dot」を設立して起業しました。「好き」を強みにして起業した「dot」。社員は楽しみながらアイデアを出し合い、クライアントとコラボしながら事業を展開。その結果、きちんと収益を上げ、成功しているのです。

教員と学生、学生同士のコミュニケーションを重視した学びは、学生の強みを伸ばせます。また、かつての大学で一般的だった「教員の話聞くだけ」の授業ではなく、学生がアクティブに取り組める授業を実践している大学も少なくありません。学生と教員がフラットな関係で互いに学び合う。



「dot」は、19年に自主ゼミのメンバー4人が設立し、「幸せ視点」に立って経営している。社名は、「draw out our talent(皆の才能を引き出す)」の頭文字を取って命名した